

「ムーラン・ルージュ」 — 絵画に描かれた風車

千葉大学大学院工学研究科都市環境システムコース准教授
一般社団法人 洗楓座 代表理事

佐藤 建吉

「ムーラン・ルージュ」は、フランス語で「赤い風車」というパリで最も有名なキャバレーの名前である。11月13日のパリの同時テロの現場から離れていたため安堵をした人も多いと思う。筆者も、パリに初めて訪

問した30年以上も前に観劇したことがあるが、中

の様子は煙と人々の雑踏で、あまり記憶がない。

その頃は、風車にも、別段の関心もなかったの

で、入口の風車も記憶にないというのが本音である。

ここで、それを取り上げるのはその後の風車との関わりによるのである。筆者が、風車と出会ったのは、すでに本コラムの⑩「ソフィストケイ」に書いたように、ロンドンであった。風車は、私たちの暮らしを支え、そして風車も進歩してきたことを記した。

「ムーラン・ルージュ」は、パリのモンマルトルに近く、画家たちは、格好のモチーフとした。ゴッホ（1853〜

90年）は、モンマルトルの風車を10点以上描いているが、「ムーラン・ルージュ」は描いていない。それは、ゴッホがパリを離れた後の1890

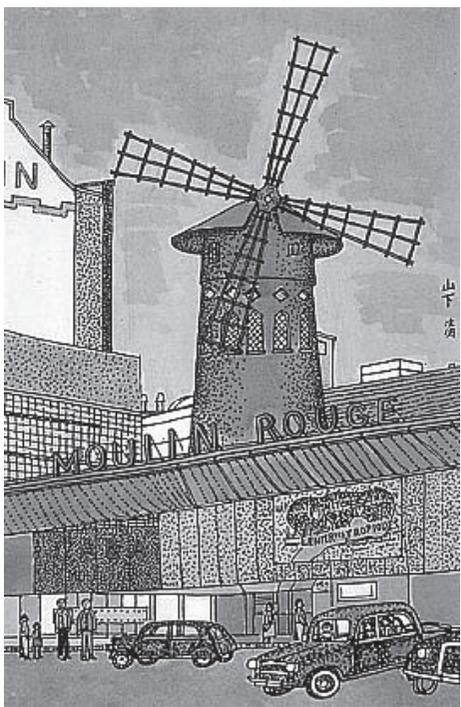
年にこの劇場が建てられたからであるが、ゴッホは、1890年、弟テオとともに、彼が自殺する地に向かう直前に近くのホテルに泊まっており、「ムーラン・ルージュ」を見ていたはずである。ゴッホの画風によるこの風車の描写を視たいものだった。

意図的な画家がこれを描

千葉大学で、「風車の技術と歴史」の講義を、一般教養科目（千葉大学では普通科目と呼んでいる）を担当していたときに、絵画に描かれた風車について調べたことがある。興味深いのは、ピーター・ブリュゲル（1525〜1699年）である。ブリュゲルは、三つの「パベルの塔」を描いている。その時代の有力な動力機械であった風車が、絵画に描かれているかどうかは、興味あることである。筆者は、それを調べるために、三つの原画が所蔵されている博物館に出かけた。実は、

風車が描かれているのは、一番有名とされるウィーン美術史美術館で展示している1点だけであり、他の2点にはない。その風車は、塔の左手奥の

小高い丘の上に、4枚羽根のポストミルとして、小さく描かれている。ロッテルダム美術館所蔵、さらにもう1点の「パベルの塔」に、風車は描かれていない。ブリュゲルの生きた16世紀、風車は、暮らしと直結した重要な動力装置であった。当時の様子を知らずして風車は、重要なアイテムともいえる。ブリュゲルの別の作品、「十字架を担うキリスト」では、同じくポストミルの風車を、孤高の岩山の上に描いている。粉挽きは、風を得て行う高所で行われる作業である。日常的暮らしである。言い換えれば、そこは、生きるための聖地であるが、処刑される者にとつては、死の世界と直結した天の聖地と重なる。描写から読み取ることができるとは、生と死は、隣り合わせであり、日常であるということがある。ブリュゲルの絵画は、風刺の精神に裏打ちされた謎解きの面白さに満ちている。



山下清による「パリのムーラン・ルージュ」
(山下氏に許可を得て転載)